

# 日本服飾の近代化をめぐる一つの挑戦と挫折

## — 斎藤佳三を中心に —

安城 寿子

### 1. はじめに

欧米において、近代以降の日本服飾が内包する「ゆらぎ」は、あまり知られていない。

洋服という新しい衣服が移入された後、日本では、服飾の改良が国家的課題として議論を呼び、同時に様々な葛藤や反発を引き起こした。そこではまた、「近代国家・日本」にふさわしい服飾を創造するため、いくつかの新しい試みが展開されることにもなった。今回の発表では、こうした試みを行った人物の一人である斎藤佳三の、大正から昭和初期における女性服飾をめぐる思想と実践に光を当てる。

明治20年に秋田県矢島町に生まれた斎藤佳三は、東京美術学校図案科を経て渡独した後、ドイツ表現主義を初めとする20世紀の前衛美術を持ち帰り、同時代の日本の美術家に多大な影響を与えるとともに、自身も総合芸術の実現のため、精力的な活動を展開したことで知られる。彼の思想と実践をめぐるのは、既に長田謙一によって多くのことが明らかにされているが<sup>1</sup>、服飾領域での彼の試みには、論じられるべきことが未だ多く残されている。

今回は、しばしば「伝統的」で安定したスタイルとしてとらえられる着物<sup>2</sup>にも、近代におけるゆらぎの瞬間があったことを紹介するという意図から、斎藤佳三の服飾観を確認した上で、彼の「リズム模様」【図1】の試みに注目していきたい。

### 2. 斎藤佳三の服飾観

斎藤佳三の服飾観<sup>3</sup>がいかなるものであったかを物語る資料の一つに、雑誌『新小説』大正7年3月号掲載の「日本人の服装問題」という論稿がある<sup>4</sup>。「僕と、僕の一部分である下手くそな図案家との対話」を想定して書かれたこの論稿において、彼は、次のような問答を繰り広げている。

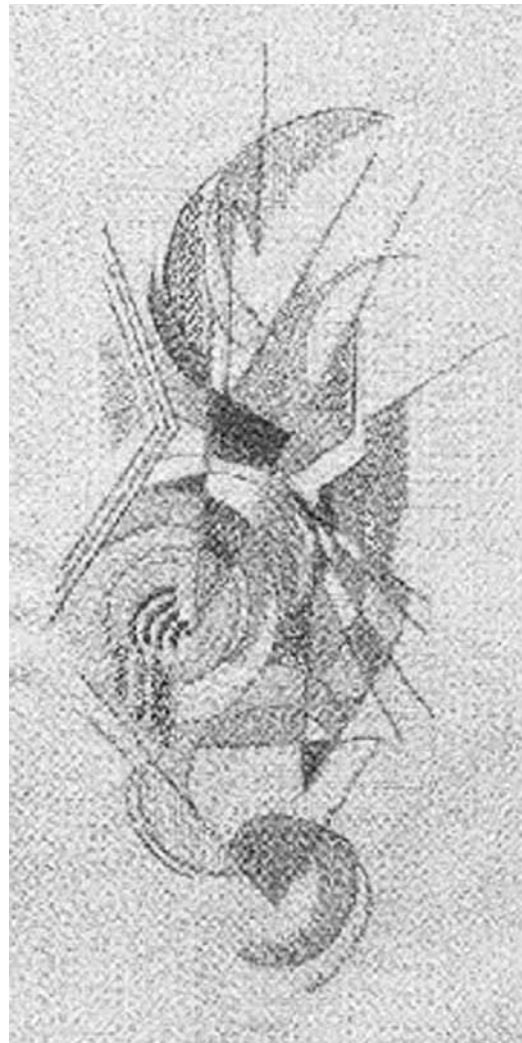
「じゃ君は早晩日本の服装が一変して或新しい生活の形式などと調和すると思ふのか。

「さうならないで奈何<sup>どう</sup>なるのだ。此ままで何時まで我慢が出来ると思ふ。西洋を見て御覧

「君は一も二も西洋だね。そんならそっくり其の

まま西洋の真似をすればいいじゃないか。俺は毛唐ぢやないからそんな真似は出来ない

「僕も出来ない、趣味の上から出来ないのだ。感情の上からも思想の上からも、あの通りには出来ないのだ。ただ西洋は兎に角ああ云ふ形に衣食住が纏ってゐる、あの統一醇化された其点丈けを真似たいのだ。形式は西洋風に限った事ぢやない。



【図1】 リズム模様半襟

ここで示されているように、斎藤にとっての服飾とは、他の生活領域との調和の下に完成されるべき一つの領域であった。続く部分で語られる「住宅改良といふ兄弟に寄り道をして、そして是非とも其住宅改良と手を取って歩まねばならないのだ。」という言葉は、彼がとりわけ住空間と服飾との調和を重視していたことを物語っているが、こうした思想が、20世紀初めの西欧において、生活と芸術、産業と芸術あるいは装飾と芸術の融合を企図して立ち現われた芸術思潮に影響されたものであることは、長田謙一の研究で明らかにされている通りである<sup>5</sup>。

しかしながら、ここで見落とすべきでないのは、住空間と服飾の調和という主題が、明治期において既に議論の俎上に上げられていたことだ<sup>6</sup>。明治期に立ち現われた着物の改良をめぐる議論は、そのまま洋服採用の是非を問う議論でもあり<sup>7</sup>、洋服採用をめぐる議論は、従来通りの座礼一床に座ったままの礼を貫くべきか立礼に切り替えるべきかという議論と不可分のもので、さらに座礼か立礼かの議論は、住空間を洋式化し、椅子を取り入れることに関する議論と切り離し得ないものであった。現代の日本の女性にとって、洋服を着て畳に正座することは、さして困難なことでもないかも知れない。しかし、明治期に移入された洋服が未だ近代化を遂げる以前のコレットやバスルをともなうものであったことを考慮に入れるなら<sup>8</sup>、その採用が何故礼法や住空間をめぐる議論と結びつけられたかが了解されよう。端的に言って、当時の洋服の構造は、美的統一の問題以前に、膝を曲げずに座ることを前提とした新しい礼法と住空間の実現なしに採用され得ないものだったのである。

以上のような歴史を踏まえた時、斎藤佳三には、西欧で試みられたと同様の総合芸術を実践しようとした美術家という位置づけとはまた別の位置づけが可能になる。すなわち、斎藤佳三は、明治期以来の懸案であった住空間と服飾の調和という問題に対峙し、後述するような実践とともにその解決を模索した人物とすることができるといえる。斎藤の思想と実践は、美的調和を何よりも重視するという点で、「体育」「衛生」といった観点に立つそれまでの議論と一線を画していることは確かであるが、「住空間と服飾の調和」という主題をめぐってもう一つの文脈が存在したことを忘れてはならないだろう。

ところで、斎藤は、当時の女性の服飾の何が問題だと考えていたのだろうか。この疑問への回答を示す資料として、大正14年27日の『都新聞』に見られる「ほんとうに意義のある服飾美の取扱ひ方」という記事を

紹介しよう<sup>9</sup>。この記事の中で、斎藤は、次のような言葉によって女性服飾の現状を嘆いている。

「服装美は決して日本婦人の望む高価な地質（錦紗、小濱縮緬、羽二重、御召縮緬等）によってのみ現るるものでないといふことを知らなければならぬ。次の問題はたとえ色彩模様の統一如何にある。日本婦人は高価な地質を己の好む羽織、着物、帯を求むるとは言いながらその各々が如何に調和するかを考えることがあまりに薄いようである。その証拠に羽織、着物帯各々一つだけを見ると相当なその人の趣好なり趣味性が現れるが、これを同時に組合わせるとすっかり調和を破壊してしまうのに驚く。」

斎藤が最も問題視していたのは、当時の女性たちの装いから全体としての調和が失われていることであった。羽織、着物、帯、草履など、一つ一つを取って見れば、美しく高価なものを身につけているのに、それぞれの部分が勝手な自己主張をするばかりで、全体として見ると、少しも美しさが実現されていない。そこに調和をもたらすことこそが、斎藤にとっての「服飾の改良」だったのである。

斎藤が、住空間と服飾の調和を重視したことは、本節の前半で既に述べた。そうであるとすれば、彼は、服飾と他の芸術領域との調和、そして服飾という領域の中における調和を同時に模索していたことになるが、この問題については、次節で再び触れることとしたい。

### 3. リズム模様の周辺

前節で引用した『新小説』大正7年3月号掲載の論稿「日本人の服装問題」の末尾には、次のような一節が見られる。

「しかしここに力説しなければならないのは極端なる変化である。これは大の禁物であって、ただ、僅かずつ、時代と思想と家庭とに順々に喰い込んで行かなければならないのである。僕の初めたのは最初は婦人服の模様と色彩の改良であった。」

この論稿には、斎藤のデザインによる着物を身につけた久邇子夫人の写真が挿入されており、彼の言う「婦人服の模様と色彩の改良」が、まず着物において試みられたことを示している。平成17年に斎藤佳三の遺族によって東京芸術大学美術館に寄贈された資料の

中には、同論稿の不鮮明な写真では模様まで判別することのできない着物と同じものを撮影したと思われる年代不明の写真【図2】があり、そこからは、着物の裾と帯とに、曲線、円、楕円からなるリズム模様がデザインされているのが分かる。斎藤自身の解説によれば、「帽子は勿論衣裳の共布れにして傘は在来のものゝの形を改良、柄長く勾配緩く之にも等しくリズム模様を以て装飾とした」とのことだが、各アイテムに同一様式の模様を配することで、なるほど彼の重視した調和は実現されたように見える。

しかし、斎藤佳三のリズム模様を、例えば帯と着物といった部分同士の調和を図るためのものとだけ考えては、解釈を誤ることになる。と言うのも、リズム模様とは、それ自体、「部分が一つの全体を形作ろうとする力」を表すものであったからだ。

リズム模様の何たるかを知るために、ここでは、昭



【図2】 リズム模様を取り入れた着物と帯を身に着けた斎藤佳三夫人

和2年8月号の『帝国工芸』に見られる「リズム模様と其応用」という論稿を紹介したい<sup>10</sup>。この論稿は、「今を去る十年前」にリズム模様が考案された経緯を示す貴重な資料であると同時に<sup>11</sup>、いささか難解ながら、リズム模様が何であるかという問いに明確な回答を与えるものであると言える。そこで斎藤は、あたかも化学者のように「分子は第一原子からなる事を定律してゐる、其原子は又如何様にして分子を組立ててゐるか」と云ふ事を説明するために、それは恐らく電氣的の引力によって原子が互に結合してゐるものであらうと考へてゐる。即原子を構成してゐる電子の最外輪のもの同志の微妙な作用によって原子が互に結合してゐると云つてゐる様である。」と述べた上で、リズム模様を次のように定義している。

「色々の原子が微妙な作用によって結合していると言うのは一体いかなる関係、いかなる条件、いかなる位置によつた場合の事であるかを想像して見るとそれは全く、ものそのものの発生動力……言を換えて見れば化学反応の素因。すなわちもの同志がある定律のあるリズムを起こして特別な変現を示すのだと見るより見方のないところに到達するのである。(中略) 簡単に言つてみればリズム模様は一つの分子式の色彩化であるとも言えよう。」

斎藤が力説しているのは、リズム模様が、一つの原子を構成するべく互いに結び付いてゆく原子の力を表すということだ。彼が分子や原子といった化学的領域に関心を寄せた背景については、さらなる検証が求められるだろうが、万事において、斎藤の関心は、より小さな部分が相互の調和を奏で、一つの全体を形作ると言うことへ向かう傾向にあった。リズム模様はその最小の単位一円や曲線など個々のモチーフが一つの模様を構成する一であり、最大の単位に当たるのが、総合芸術—住空間と服飾、舞踊、音楽といった諸芸術のジャンルが相互に連関し一つの世界を構成する一であったと言える。先に触れた着物と帯、羽織、草履など、服飾アイテムの調和は、これらの中間に位置づけられるもので、端的に言えば、斎藤が求めてやまなかったのは、調和によって裏付けられた調和、最小の単位から積み重ねられる高次の統合ということになるのではないだろうか。

さて、リズム模様の最初の試みは、大正6年に白木屋呉服店で展示されたリズム模様半襟であったが<sup>12</sup>、先述の通り、翌7年には着物と帯にリズム模様が応用

され、大正11年には、帝国ホテルでお茶の給仕に出る女性のため、やはりリズム模様の着物と帯が手がけられた<sup>13</sup>。さらに、この模様は、住空間の装飾としても取り入れられ、例えば、昭和3年10月の第九回帝展に入選を果たした「食後のお茶の部屋」では、肘掛け椅子の背の部分にリズム模様が【図3】、昭和5年10月の第十回帝展入選の「日本間の寝所」においても、ベッドヘッドの衝立にリズム模様とおぼしき図柄を見ることができる【図4】。

こうした試みを踏まえた時、リズム模様は、それ自体の中に調和への力を内包しつつ、先述のような服飾という領域の中での調和、そして、服飾と住空間という異なる領域を結び、一つの世界を形作る鍵として、広大な奥行とともにとらえられる。そこには、明治期以来議論続けられた、これら二つの領域の「調和」をめぐる新しいパースペクティブが広がっていたと言える。

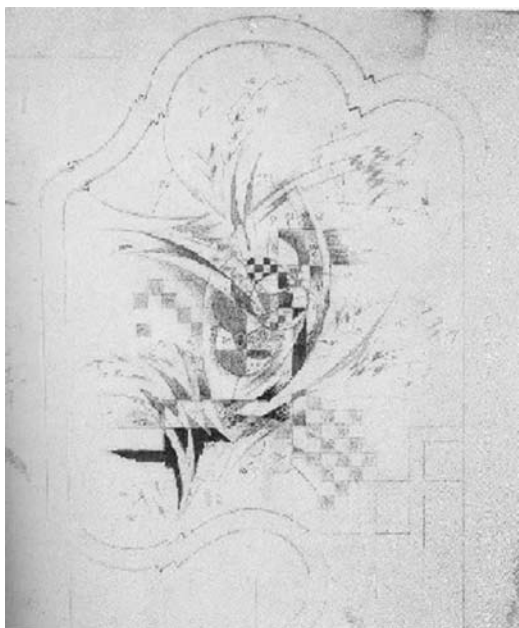
#### 4. その後—皮肉な結末へ—

斎藤佳三の思想と実践とが全体主義的傾向を強めるのは、何時のことだろうか。

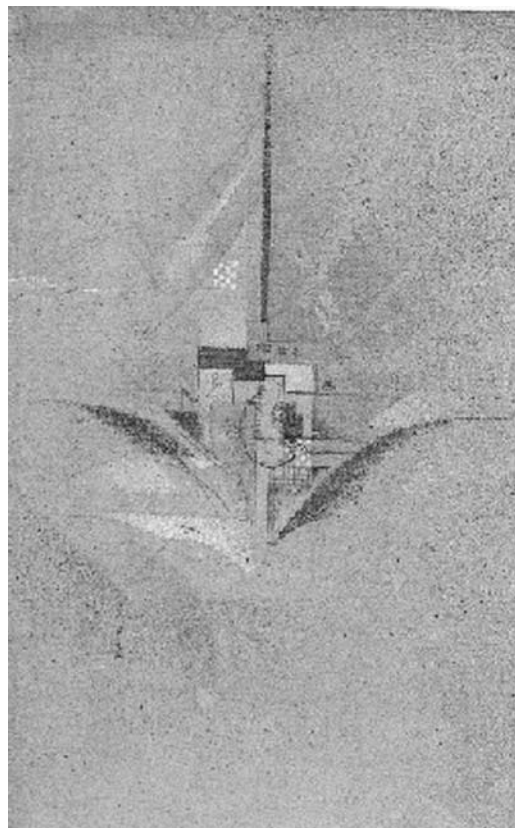
斎藤は、その後も精力的な活動を続け、昭和10年に、流行考査所という服飾の流行に関する研究機関のようなものを設立。付属の教育機関として、ラ・モード服飾創作学院も創立し、服飾をめぐる探求をさらに深め

ていくことになった。しかし、昭和13年には、国民精神総動員中央連盟の服装に関する委員に任命され、17年に大日本婦人標準服協会理事<sup>14</sup>に任命された頃には、彼の思想も実践も、明確に国家と戦争勝利のためのものとして方向づけられていた。皮肉にも言うべきか、斎藤が描いてきた服飾の調和と総合芸術の壮大な理想は、それらと似て非なる単一の「夢」を強いる全体主義と歩みをともにすることになったのである。こうした針路の取り方は、緊迫する時局を生き延びるべくやむなく選択されたものと見ることもできるようなが、あくまで「日本の女性」の服飾の調和を求めてやまなかった斎藤の思想は、最初から悲劇の種を内包していたと言えるかも知れない。

今回の発表では、時間の限界から、斎藤佳三の調和を重視する思想やリズム模様の試みが、いかにして全体主義的妄想へと変貌していったかまでを追うことができなかった。今後の課題とするとともに、機会が与



【図3】「食後のお茶の部屋」肘掛け椅子の背の刺繍図案



【図4】「日本間の寝所」のベッドヘッド衝立の装飾図案

※出典はすべて『斎藤佳三の軌跡』展図録、東京芸術大学大学美術館、平成18年。

えられるなら、再びパリ第七大学での報告を行ってきたい。

注

- 1 長田謙一「〈総合芸術〉の諸相と斎藤佳三〈表現派〉〈装飾精神〉・〈流行〉」『1920年代・日本』展図録、東京都美術館他、昭和63年、pp.250-256。「日本のモデルネと斎藤佳三の〈表現主義的日本〉」『日本の眼と空間』展図録、セゾン美術館、平成3年、pp.70-74。『斎藤佳三 ドイツ表現主義・夢の交錯』INAX出版、平成4年。
- 2 「着物」という呼称が一般化を見せるのは戦後のことで、明治から期昭和戦前期にかけては、「日本服」「和服」などと呼ばれていた。
- 3 斎藤佳三の服飾観を主題として取り上げた研究としては、「ブルーノ・タウトと斎藤佳三の服飾観」『服飾美学』36号、平成15年3月、pp.15-30を挙げることができる。
- 4 pp.27-38。
- 5 注2参照。
- 6 例えば、三輪田眞佐子は明治31年12月5日号の雑誌『女子のとも』に寄せた「女子の服装に就いて」という論稿の中で、「服装も、住家の情態と共に変更すべき必要あり。」と述べており(p.3)、また、雑誌『女鑑』明治

- 42年3月1日号掲載の井口あぐりの論稿「女子の体育と服装問題」にも、「体格を八釜しく云った処で、第一住居から衣服迄改良してかからねば遺憾ながら発達を遂る事は出来なからう」という記述を見ることができる(p.73)。
- 7 明治期における服飾改良に関する研究としては、以下のものを参照。夫馬佳代子「明治期の衣服改良運動について」『風俗』no.83、昭和60年6月、pp.27-38。
- 8 中山千代『日本婦人洋装史』吉川弘文館、昭和62年、pp.208-344。
- 9 p.6。
- 10 pp.27-30。
- 11 p.28には、「之は今を去る十年前私が此行き方の模様を発案した当時玄文社の理事をしてゐた結城禮一郎先生と放送局の前放送部長をしてゐた服部愿夫先生とが、之に眼をとめて態々白木屋の重役達迄紹介に行つて呉れた、それから引続き三ヶ年間と云ふものこの展覧会を開く事が出来たのであった。」という記述が見られる。
- 12 前注参照。
- 13 「新時代に適応する婦人の服装と…」『国民新聞』大正11年10月31日。
- 14 婦人標準服および国民服の問題を扱った研究としては、井上雅人『洋服と日本人』廣済堂出版、平成13年を参照。

あんじょう ひさこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻  
博士後期過程3年